

信仰とはなにか

アビダルマ佛教における教えの展開と実践

立正大学 三友 健容

天台智顛は、『摩訶止観』の為人悉檀で「佛法は海のように広大であり、信ずることによって佛法に入ることができる。信は佛道の源であり、功德の母であり、一切の善法はこれによって生ずる」と説き、大乘佛教の修行段階を五十二位（四十二位）で説明し、大乘では十信がその最初であるとして、大乘佛教はことさら信を強調したといわれ、日本佛教は、この思想を引き継ぎ、なによりも信が一番重要なものとして扱われてきた。

これは、原始佛教以来の考え方を踏襲したものである。すなわちスッタニパータには、信 *saddhā* によって激流を渡ると説かれ、信が佛道修行の基本的要件として重視され、その後、教理が整理されても、原始佛教での信の重要性は変わっていない。また、修行者にも随信行と随法行とがあり、随信行者は智慧が充分でなくても、信によって預流へと進むことができるとも説いている。

ところで、大乘佛教のもととなっている有部のアビダルマ教理では、原則的に学解を第一としている。学解のないものは、四諦の理を観察できないから、到底さとりには至らないものとなる。では、アビダルマ佛教で、信を説かなかつたかという点、『俱舎論』では、十大善地法の第一に信を説いて、善心を生じる場合の重要な要素としている。しかし、それは善き心を起こしたときには信が必ずはたらくというものであるから、とくに重視していたということでもない。世親は『俱舎論』の敬礼偈で、如理師に敬礼すると述べているのに対して、『順正理論』は世間では邪師・異論に惑わされているが、われわれの師である釈尊は、一切の諸の冥を離れており、われわれに殷淨の信心を引發するとして、邪師・異論に賛同する気持ちがあるならば、「信」とはいえないと世親を牽制している。

それゆえ、一切の煩惱を断じられた佛陀こそ、尊敬すべき方であり、信すべき方だとするが、それ以外の邪師・異論に対する「信」は、正しい「信」とは認められないということになる。一方、佛教徒になれる条件について、世親は外国師の意見を尊重し、三帰依だけでも在家信者となれるというが、衆賢は、その経典を偽経であるという。また、『俱舎論』では、信はこころの清らかさとする有部説のほかに、別な人々は、四諦、三宝、業因・業果に対する確信であるとする意見を紹介している。

ところで、随信行は、信のみでよいというものではない。マッジマ・ニカーヤには、信・勤・念・定・慧の五根が備わっているものという条件がある。また、*śraddhā* のほかに、同じような意味合いを持つ語として、*adhimukti* などもあるが、これらの要語も十分に検討しなければならない。そのうえで、修行道との関係、声聞にとって信仰とは何か、実践との関係と随信行・随法行などについても精査する必要がある。

本発表では、信仰とはなにかを、アビダルマ佛教における教えの展開と実践の観点から究明する。（随信行、*śraddhā*、*adhimukti*）